

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Four-Chinese-character Words in Written Documents of Dutch Studies

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朱, 京偉, ZHU, Jingwei メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000486

蘭学資料の四字漢語についての考察 ——語構成パターンと語基の性質を中心に——

朱 京偉

北京外国語大学

国立国語研究所 理論・構造研究系 客員教授 [-2010.10]

要旨

朱京偉 (2011a) では、蘭学資料の三字漢語を考察し、また、在華宣教師資料の三字語との比較を朱京偉 (2011b) によって行なった。本稿では、こうした先行研究を踏まえ、新たに蘭学資料の四字漢語を研究対象として選んだ。2+2型の四字漢語を前部二字語基と後部二字語基に分けて、語基の品詞性と造語力、および、結合関係と出自状況など、種々の側面から四字漢語の性格を探ろうとした。その結果、明治初期に備わっていた四字漢語の造語機能は、蘭学資料の時代においてすでに相当の発達を遂げていたことを実証した。

キーワード：四字漢語、蘭学資料、漢語の語構成、漢語の語基

1. 四字漢語研究の歩み

明治初年の『明六雑誌』(1874-75)を調べてみると、二字漢語・三字漢語の新語とともに、「開化進歩、共和政治、君民同権、出版自由、文明開化、立憲政治」のような、新しい概念を表す四字漢語も数多く用いられていた。このような語は、二つの語基に分解したり、語基同士の結合によって新語を創出したりすることが可能なので、成語と呼ばれる「呉越同舟、四面楚歌」のような四字熟語とは構造が異なる。では、明治初期にすでに見られる四字漢語の造語機能はいつできたのか。この問題を解明するには、時代を遡って、明治漢文体の前身ともいえる蘭学資料での使用状況を把握する必要があると思われる。

本稿の目的は、主要な蘭学資料から四字漢語と見なされるものを抽出し、当時の使用状況や語構成の特徴を明らかにすることにあるが、これに先立って、四字漢語についての研究の歩みを簡単に振り返ってみたい。日本漢語を字数別に分けてその語構成に言及した最初の論考は、山田孝雄(1940:282-290)に見られる。氏は、著書の第五章に、「一字の漢語」「二字の漢語」「三字の漢語」とともに、「四字以上の漢語」という一節を設けた。そこで、四字の漢語を体言として使われるものとそれ以外のものに二分し、その下でいく通りの下位分類を置いた。ただし、掲出された用例を見れば、「千山万水、意馬心猿、大同小異、優柔不断」のように、生産性のない旧来の四字熟語がほとんどである。

山田孝雄(1940)の後を受けて、斎賀秀夫(1957)は語構成の問題を正面からとりあげた論文として注目に値する。同論文の前半では、漢語だけでなく、和語・外来語・混種語を含めた語構成論を展開していたが、後半では、山田孝雄や松下大三郎の説を踏まえて、「並立関係」「主述関係」「補足関係」「修飾関係」「補助関係」「客体関係」の6分類を打ち出し、「語結合の意味的關係」

について論じられた。また、この6分類を説明するために、「薄利-多発, 住所-氏名, 生産-上昇, 映画-見物, 戦争-否定」のように、生産性のある近代的な四字漢語の用例が数多くあげられている。この論文からは、漢語の語構成論に新たな進展があったことが読み取れる。

また、野村雅昭(1975: 67-74)は、語基の性格から結合パターンまで、四字漢語の語構成を全面的に考察した画期的な論文といえる。その成果は次のようにまとめられる。①新聞の語彙調査のデータをもとに、計量的視点から現代日本語の四字漢語をとりあげた。②四字漢語の構成パターンとして、I型(2+2型)と非I型(1+3型, 3+1型, 1+1+1+1型)の分類を打ち出した。③二字語基の品詞性に注目し、品詞別に語基の役割を検討した。④四字漢語の語基間に見られる「構文論的結合関係」については、5類11種(下位分類を含めると24種になる)を提示した。⑤「みかけの構造から操作的にとらえることができる構造」を基底構造と呼び、四字漢語の字面に顕現しない要素も語構成の下位分類を行なうときの手がかりに用いた。以上のような方法によって、四字漢語の構造分析は、それまでの漢文的構文論に基づいた方法から脱出し、日本漢語の実際に一步近付いたように思われる。

もう一つ注目すべき研究は石井正彦(2001: 7-11)である。この論文では、四字漢語の臨時一語的な側面がとりあげられ、臨時一語(四字漢語)がどのように新聞の文脈から短縮によって形成されたかのプロセスが示された。四字漢語の研究にとって、次の2点はとくに重要な成果だと思われる。まず、臨時一語の抽出についてであるが、たとえば、「派閥からの離脱→派閥離脱, 停戦に合意した→停戦合意」のように、先行する文脈にあって、臨時一語の構成要素を含めた統語構造の語句も、臨時一語とともに抽出されている。これは、四字漢語の語構成を考えるとときの貴重なデータである。もう一つは、四字漢語の構造分析にあたって、野村雅昭(1975)の分類法を受け継ぎ、語構成パターンを5類12種とした上で、下位分類は、臨時一語の実例を踏まえて、93種まで細分されている。しかも、論文後の付録一覧において、臨時一語の形成に直接関わる統語構造の実例(1725種)も、下位分類のパターンごとに用例数付きで、すべて掲出されている。これによって、「構成要素(二字語基)間の構文的な関係」が目に見える形で確認できるようになった。

以上のほか、四字漢語の問題を論じたものとして、村木新次郎(2002)や朱京偉(2004)などもあげられる。

2. 抽出した四字漢語の概況

これまでに、筆者は蘭学資料の三字漢語をとりあげて検討したことがあるが、本稿では、表1の通り、三字漢語のときと同様の蘭学資料を用いることにした¹。この7種の資料から漢字4字で、ひとまとまりの意味を表す文字列を最大限に抽出し、重複の語を除いて語の異なりを求めた。作業にあたって、各資料の成立年次に従い、同一語で初出が一番早い用例だけを残して、その他の重複語を除くようにした。その結果、各資料の抽出語の語数は表1のようになった。

¹ 蘭学資料の選定については、朱京偉(2011a)の第3節で詳しく述べているので、参照されたい。

表1 調査の対象資料と四字漢語の抽出語 (異なり語数)

資料名	分野	文体・総字数	抽出語数	版本
1798 『暦象新書』 志筑忠雄訳	物理学	漢字平仮名, 12.8 万	31	文明源流叢書
1805 『医範提綱』 宇田川玄真著	医学	漢字片仮名, 4.9 万	173	風雲堂蔵版
1815 『眼科新書』 杉田立脚訳述	医学	漢文+返点, 7.3 万	75	群玉堂蔵版
1836 『窮理通』 帆足万里撰	物理学	漢字平仮名, 22.7 万	38	科学古典全書
1851 『気海観瀾広義』 川本幸民訳	物理学	漢字片仮名, 17.3 万	82	静修堂蔵版
1852 『理学提要』 広瀬元恭訳	物理学	漢文+返点, 5.1 万	39	時習堂蔵版
1857 『扶氏経験遺訓』 緒方洪庵訳	医学	漢字片仮名, 31.7 万	123	適適齋蔵版
		101.8 万字	561	

抽出語数が全般的に低い数字になっていることから見ると、蘭学資料における四字漢語の使用がまだ少なかったというべきであろう。分野別で見れば、医学3資料(43.9万字)と物理学4資料(57.9万字)から、それぞれ371語(66.1%)と190語(33.9%)を抽出した。医学資料の分量が少ないわりに、抽出語の数が物理学資料のそれを上回っているため、医学資料では、四字漢語が比較的多く用いられていたことがわかる。また、語構成の面においては、抽出した四字漢語を構成パターンの相違で振り分けると、表2のようになる。本稿では、四字漢語の9割以上を占める2+2型をとりあげる。なお、抽出語の字体はみな現行の日本漢字の字体になおした。

表2 四字漢語の構成パターンの内訳

構成パターン	語数 (%)	語 例
2+2型	514 (91.6)	呼吸+困難, 過剰+運動, 冷血+動物, 栄養+過度, 屈伸+運転
3+1型	40 (7.1)	十二指+腸, 粘液様+症, 壊血病+症, 補充機+系, 無機性+体
1+3型	3 (0.6)	肺+動血脈, 肺+静血脈, 小+固結腫
1+1+1+1型	4 (0.7)	雲+霧+風+雨, 細+薄+軟+脆, 堂+房+門+墅, 喜+怒+哀+楽
合計	561	

3. 二字語基の品詞性と結合関係

2+2型四字漢語の語構成に目を向けたときに、まず、前部二字語基と後部二字語基の品詞性が問題になるが、研究対象となった514語の範囲では、すべての語基を、名詞性語基(N)・動詞性語基(V)・形容詞性語基(A)の3種類に分類することができた。その分布状況は表3の通りである。

表3 前部二字語基と後部二字語基の品詞性

	前部二字語基 (%)	後部二字語基 (%)
名詞性語基 (N)	363 (70.6)	138 (26.9)
動詞性語基 (V)	128 (24.9)	307 (59.7)
形容詞性語基 (A)	23 (4.5)	69 (13.4)
合計	514 (100)	514 (100)

表3でわかるように、前部二字語基では名詞性語基 (N) が圧倒的に多いが、後部二字語基になると、動詞性語基 (V) と形容詞性語基 (A) が大幅に増えている。前部二字語基と後部二字語基では、品詞性の分布がかなり違うことがわかる。この相違のあり方は、四字漢語内部の結合関係と密接に関連していると思われる。そのため、語基の品詞性ととも、前部二字語基と後部二字語基はどのような文法的結合関係で結ばれているかということが、四字漢語の語構成を考えるのにあたって重要なポイントになる。

四字漢語内部の結合関係は、日本語と中国語を問わず、この点で共通しているが、文レベルでの統語構造を圧縮したような仕組みとなっており、主述関係・修飾関係・並列関係・客述関係・述客関係といった結合パターンにまとめることができる²。たとえば、「精神乏弱」という語を取って見ると、「精神」と「乏弱」は、それぞれ名詞性語基 (N) と形容詞性語基 (A) で、「精神ガ乏弱ダ」のように解釈できるので、N+A 主述関係の四字漢語ということになる。また、「粘液分泌」という語では、「粘液」と「分泌」は名詞性語基 (N) と動詞性語基 (V) で、二つの語基は「粘液ヲ分泌スル」という結合関係で結ばれているので、N+V 客述関係の四字漢語としてあつかうことができる³。

しかし、蘭学資料の漢字仮名混じり文では、格助詞の省略が頻繁に行なわれるため、格助詞の省略やサ変動詞の自他混同などによって、二通りの結合関係に解釈できそうな四字漢語は少なからず存在する。実例を踏まえていえば、このような二義的解釈は、N+V 主述関係と N+V 客述関係の間で最も生じやすい。たとえば、「大気分離」は、「大気ガ分離スル」と見なせば N+V 主述関係であるが、「大気ヲ分離スル」とすれば N+V 客述関係の語になる。このような場合は、原著の文脈にあたって適切な結合関係に分類するよう心がけた。たとえば、「大気分離」は『気海観瀾広義』で次の文脈に用いられている。

・大気ノ酸素ヲ引キテ、コレト合セシムルニ方テ、大気分離シ、温素顕レテ火トナリ。(巻七)

「大気分離シ」の前には動作主となる主語らしいものがなく、しかも、後続の「温素顕レテ」は、省略された格助詞を補うと、「温素 (ガ) 顕レテ」になるはずなので、「大気分離」も「大気 (ガ) 分離シ」のように、N+V 主述関係の語と考えるべきであろう。このような語構成判断の作業を経て、2+2 型四字漢語の結合関係は次表の形でまとめることができる。

² これに関して、前述のように、野村雅昭 (1975) では「構文論的結合関係」、石井正彦 (2001) では「構文的な関係」と、それぞれの言い方を与えている。小論では、諸先学の言い方を踏まえながら「客述関係、述客関係」のように、部分的に修正を加えたところがある。

³ 野村雅昭 (1975) と石井正彦 (2001) では、四字漢語の字面に顕現しない構成要素も取り入れているため、構成パターンの下位分類が多くなっているが、筆者は日中対照を行なう場合の対応関係を考慮し、顕現しない構成要素を取り入れないことにした。

表4 2+2型四字漢語内部の結合関係

結合関係		語数 (%)	語 例
主述関係 217 (42.2)	N+V	156 (30.3)	液質+調和, 球子+集合, 生機+発動, 体温+減却, 物体+燃焼
	N+A	61 (11.9)	感動+過敏, 脂肪+過多, 性力+強健, 尿道+刺痛, 粘力+微小
連体修飾関係 132 (25.7)	N+N	88 (17.1)	環状+軟骨, 歳輪+視差, 生機+活動, 繊維+組織, 地球+重力
	V+N	36 (7.0)	牽引+神経, 降下+時刻, 証治+方法, 草食+動物, 落着+速力
	A+N	8	過剰+運動, 同等+速力, 不好+導體, 慢性+痼疾, 有形+病因
並列関係 102 (19.8)	V+V	91 (17.7)	栄養+長育, 揮発+衝動, 拳動+運転, 包摂+囲護, 労費+消耗
	N+N	6	嘗為+感触, 感覺+触知, 形状+容貌, 触知+拳動, 精神+気血
	A+A	3	柔軟+厚实, 柔軟+疏松, 醇厚+活発
	V+A	2	中和+平全, 膨脹+稀薄
客述関係46(9.0)	N+V	46 (9.0)	引力+發明, 食物+消化, 生命+保続, 弾力+増進, 分子+離析
連用修飾関係 17 (3.3)	A+V	10 (1.9)	活発+迸射, 頑硬+結腫, 醇厚+熟成, 病的+抑閉, 流利+滲入
	N+V	7	子宮+分娩, 実性+失血, 定時+発歇, 腹疾+喘息, 目視+触知

この表でわかるように、主述関係の四字漢語は最も多く、抽出語全体の42.2%を占めている。このほか、連体修飾関係の四字漢語は25.7%、並列関係の四字漢語は19.8%と続く。客述関係と連用修飾関係は四字漢語の少数派で、両者を合わせて12.3%になる。以下では、表4の分類に基づいて、各パターンの性質を検討していきたい。

4. 四字漢語の結合関係の検討

近代以前の漢籍では、句読点の使用がほとんどなく、主語と述語が揃っていれば、文の形になるようになっていた。当時の人々にとって、決まり文句の四字熟語(成語)とは別に、漢字4字(2+2)で一定の統語的な関係を成し、意味的にもひとまとまりになる文字列については、四字語としてではなく、単なる句または文としてとらえていたと思われる。

一方、蘭学資料では、漢字4字の文字列がどうとらえられていたか、四字漢語として意識されていたかどうかは検討すべき問題であろう。これにあたって、後部二字語基を、体言性(N)のものと言言性(V・A)のものに二分して考える手順が必要になる。前者の場合は、漢字仮名混じり文の蘭学資料で、漢字4字の文字列がその前後の仮名表記によって区切られ、しかも、ひとまとまりの意味を持っていれば、四字漢語として認められやすいと思われる。上掲の表4でいうと、N+N・V+N・A+N連体修飾関係やN+N並列関係の四字漢語はこれにあたる。しかし、後者の場合は、前者の条件に加え、用言性の後部二字語基の活用変化も考慮しなければならないため、事情はより複雑になる。

用言性の後部二字語基を持つ四字漢語の接続パターンを調べてみると、実際の文脈では、動詞の活用形(シ・シテ・スル・ス)や形容詞の活用形(ナル・ニシテ)だけでなく、名詞に付く格助詞(ノ・ハ・ヲ・ニ・ト・モ)が後続する用例もあれば、後続するものがなにもない「はだか格」(名詞止め・見出し)の用例も多数あることがわかった。もし、「はだか格」の用例を名詞的接続の類として考えるなら、用言性(V・A)の後部二字語基を持つ四字漢語の接続パターンは

表5のようにまとめられる。

表5 用言性の後部二字語基を持つ四字漢語の接続パターンの分布

結合関係		語数 (%)	動詞接続 (%)	形容詞接続 (%)	名詞接続 (%)
主述関係	N+V	156 (30.4)	80 (51.3)	1 (0.6)	75 (48.1)
	N+A	61 (11.9)	0	21 (34.4)	40 (65.6)
並列関係	V+V	91 (17.7)	56 (61.5)	0	35 (38.5)
	A+A	3	0	2	1
	V+A	2	0	0	2
客述関係	N+V	46 (9.0)	17 (37.0)	0	29 (63.0)
連用修飾	A+V	10 (1.9)	8	1	1
	N+V	7	1	0	6

以下では、表5にある主要な接続パターンの実例をあげながら、四字漢語のとらえ方およびそれぞれの特徴について検討してみたい。

4.1 主述関係の四字漢語

この種の語は、抽出語全体の4割以上を占め、語数が最も多いので、蘭学資料にある四字漢語の代表的な語構成パターンともいえる。主述関係の四字漢語として認定するには、前語基の後に付く主格の助詞（ガ・ノ・ハ）が省略され、しかも、後語基は用言（動詞・形容詞）でなければならないという形態上の条件が必要である。表5でわかるように、N+V主述関係の四字漢語では、動詞の活用形（ス・スル・シ・シテ）が後続する用例は約半数を占めている。たとえば、

- ・創傷出血スルトキハ、血直ニ大氣中ノ清氣ニ触レテ…。(『氣海観瀾広義』巻十)
- ・物体凝結シ、温素ハ飛散ス。(『氣海観瀾広義』巻十)
- ・全軀消削シテ、体温減却ス。是自ラ死ニ趣ク前路ニシテ…。(『扶氏経験遺訓』巻十三)

上掲の用例では、漢字4字の文字列に「スル」を付けてその全体をサ変動詞化しているとも考えられるが、文字列の中に名詞の部分（前語基）が含まれているので、やはり主格の助詞（ガ・ノ・ハ）が省略されて四字漢語の形になったというとらえ方が自然であろう⁴。一方、後語基が動詞性なのに、名詞と同様な接続形（ノ・ヲ・ニ・モ・名詞止め）が用いられた用例は半数近く見られる。たとえば、

- ・大便秘結ノ症ハ腸液滲出スルコト少ク…。(『医範提綱』巻二)
- ・形質飛揚を為すは、引力に非ざるなり。(『窮理通』巻之四)
- ・大氣不良、血液脱泄等凡ハ生力ヲ減耗シ神經ヲ罷弊セシムル諸件…。(『扶氏経験遺訓』巻一)

⁴ 対照的な例として、2番目の用例にある「温素ハ飛散ス」は、助詞「ハ」が省略されていないため、四字漢語にはならない。なお、省略されたのは主格の助詞（ガ・ノ・ハ）なのか、それとも、目的格の助詞（ヲ）なのかについては、すでに第3節で述べた通りで、判断しにくい場合がある。

なお、「眼瞼破裂、瞳孔異常、眼球突出、角膜潰瘍、肺臓結核、神経感動、液質変常」など、本文の見出しとして単独に用いられた用例も名詞止めの用法として分類した。

上掲の「大便秘結」を例にすると、その語構成について、二通りの考え方ができる。一つは、「大便ガ秘結スル」のように理解し、「ガ・スル」の省略によって「大便秘結」になったということで、N+V 主述関係としてとらえる考え方である。もう一つは、後語基の「秘結」を名詞扱いにし、「大便ノ秘結」から短縮して四字漢語になったととらえる考え方で、この場合の「大便秘結」は、前者と違って、N+N 修飾関係になる。「大便秘結」は漢籍に典拠を持つ言葉なので、漢籍の影響を考えれば、文構造に近い N+V 主述関係と見るのが合理的だと思われるが⁵、一方、蘭学資料には、「病的ノ抑閉」「乳糜ノ製造」「血液ノ化醸」のように、動詞性の後語基を名詞扱いにする用例が見られるので、語構造に近い N+N 修飾関係として意識されていた可能性も排除できない。このように、N+V 主述関係は、文構造と語構造の両方にとらえられる可能性があるとはいえ、ひとまとまりの意味を持っている点においては、四字漢語と考えてもさしつかえないと思われる。

また、N+A 主述関係の四字漢語を見てみよう。表 5 によると、形容詞の接続形（ナル・ニシテ）が用いられた用例（下記の前 2 例参照）は 34.4% にとどまり、その他の 65.6% は名詞の接続形（ノ・ヲ・ニ・名詞止め・見出し）が用いられた用例（下記の後 4 例参照）となっている。たとえば、

- ・感覚敏捷ナル者ナリトイフヲ以テ、コレヲ考フレバ…。(『気海観瀾広義』巻十三)
- ・大気ハ弾力強盛ニシテ縮張シ易ク、…。(『気海観瀾広義』巻八)
- ・血脈過敏ノ者及ビ血液鬱滞ニ傾ク者ニ於テハ殊ニ然リトス。(『扶氏経験遺訓』巻八)
- ・或ハ感覚過敏ヲ兼ル者、或ハ死後其屍ヲ解剖スレバ…。(『扶氏経験遺訓』巻四)
- ・血液稀淡ニ過テ栄養温暖ヲ為スニ足ズ。(『医範提綱』巻三)
- ・身体諸部ヲ栄養スルコト無フシテ精力乏弱、神志況重ヲ為ス。(『医範提綱』巻二)

この種の用例についても二通りの語構成が考えられる。後語基を形容詞としてとらえるなら、「感覚ガ敏捷ダ」「弾力が強盛ダ」のように理解できるので、N+A 主述関係になるが、後語基を名詞としてとらえると、語構成は「感覚ノ敏捷」「弾力ノ強盛」のような形に変わり、N+N 修飾関係になる。問題は、後語基が形容詞から名詞へ自由に切り替えられるかどうかである。漢籍では、N+A 主述関係を持つ漢字 4 字の文字列は語ではなく、文として意識されることがかなり多かった。これに対し、蘭学資料では、後語基が形容詞性なのに、6 割以上の用例は名詞の接続形となっていることから、文構造に近い N+A 主述関係よりも、語構造に近い N+N 修飾関係の四字漢語としてとらえようとする傾向が強かったといえよう。

4.2 並列関係の四字漢語

並列関係の四字漢語は、品詞性の同じ前語基と後語基（V+V・N+N・A+A）からなり、し

⁵ たとえば、漢方医書『医説』（南宋・張杲撰、13世紀初）には“大便秘結、小便赤而喜冷飲食者、此熱痛也。(巻五)”とある。(大便が秘結し、小便が赤くて冷たい飲食を好む者は、此れ熱病である。)ほかにも用例が多数見られる。

かも、語基同士が語義の形成においてほぼ同等の役割を担っているという特徴を持つ。両語基の結合関係は、たとえば、「縮張運転 (V+V) → 縮張シ運転スル」「形状容貌 (N+N) → 形状ト容貌」「柔軟疏松 (A+A) → 柔軟テ疏松ダ」のように、語基の品詞性に適した助詞や活用形を補って表現することが十分考えられるものの、蘭学資料では、そうした用例が見当たらないことから、おそらく漢籍漢文の影響で、意図的に漢字4字の形、すなわち四字漢語の形に整えられたと思われる。ただし、両語基の意味的なつながりについては、「柔軟+厚実、営為+感触、膨脹+稀薄、生成+化育、栄養+長育」などでもわかるように、並列関係といいながらも、多種多様な組み合わせを見せており、法則化しにくいものがある。

並列関係の四字漢語のうち、V+V 並列関係のものは圧倒的に多い。表5によると、この種の語では、語尾に動詞の接続形 (シ・シテ・ス・スル) が用いられた用例は約6割を占め、残りの4割近くの用例は名詞の接続形 (ノ・ハ・ヲ・ト・ニ・名詞止め) となっている。後部二字語基が動詞性なのに、なぜ名詞の接続形が用いられるか。ここで、連体修飾の機能をともに持つ「-スル」と「-ノ」の比較によって、この問題を考えたい。まず、動詞の接続形「-スル」の用例をあげてみよう。

- ・其体ハ鳥ノ腸ノ転廻暈束スルニ似タリ。(『医範提綱』卷一)
- ・其質ヲ膨脹溶解スルヲ以テ…。(『気海観瀾広義』卷七)
- ・飛散逆脱スルコト無ク、子宮ニ射入セシム。(『医範提綱』卷二)
- ・一種ノ張力有リ、温暖ヲ得テ而シテ膨脹増拡スル者ノ是レ也。(『理学提要』卷一)

それぞれの用例で、「-スル」の後接成分は、「スルコト・スル者・スルニ・スルト・スルヲ」のように、例外なく形式体言や格助詞となっている。これに対して、名詞の接続形「-ノ」の用例を調べてみると、たとえば、

- ・酸素、人身ニ於テ能ク刺戟衝動ノ(之)峻力ヲ具ヘ…。(『理学提要』卷一)
- ・天地ノ間、生育保続ノ(之)機或ハ熄シカナ(哉)。(『理学提要』卷一)
- ・攀急擗撃ノ病、甚シフシテ遂ニ頭中ニ及ビ…。(『医範提綱』卷一)
- ・諸々排泄物腐臭有テ、衰弱脱力ノ極ニ至ル。(『扶氏經驗遺訓』卷二)

のように、「-ノ」の後接成分は、「ノ病・ノ用・ノ勢・ノ性・ノ証・ノ法・ノ力・ノ類・ノ諸患・ノ常度・ノ塩気」のように、みな一字・二字の漢語または訓読みの漢字語である。このような事実を踏まえて、連体修飾用法の「-スル」と「-ノ」の使い分けの理由を考えると、漢文体の助詞「之」のかわりに「ノ」が使われた上掲の前2例がポイントになると思われる。つまり、サ変動詞の連体形として「-スル」を使うのは本来の日本語文法のはずであるが、蘭学資料で、「-ノ」が「-スル」のかわりに用いられたのは漢文体の助詞「之」の使い方に影響された可能性があると考えられよう。

また、名詞の接続形「-ヲ」の使い方を見ると、全11例の中で、「-ヲ為ス(シ)」の4例と「-ヲ覚ユル」の3例は大半を占めており、その他、「-ヲ患ル・-ヲ起ス・-ヲ透発シ・-ヲ滑

利ニシテ」は各 1 例となっている。このうち、とくに注目したいのは次の 2 例である。

- ・意ノ向フ所ニ随テ諸筋ノ挙動運転ヲ為ス。(『医範提綱』卷三)
- ・両便失禁スル者、劇キ擣掣拘急ヲ起ス者等ハ皆大悪徴ナリ。(『扶氏経験遺訓』卷一)

この 2 例では、「挙動運転」と「擣掣拘急」の後に名詞の接続形「-ヲ」が用いられたとともに、その前には連体修飾語の「諸筋ノ」と「劇キ」がそれぞれ置かれている。これは、V+V 並列関係の「挙動運転」と「擣掣拘急」を名詞扱いされていた証拠として見受けられる。結論をいうと、並列関係の四字漢語は、両語基の意味的なつながりが多種多様で、臨時的な結合も多いとはいえ、二つの語基で別々の概念を表す語連結に比べれば、なお、ひとまとまり感の強いものである。蘭学資料で、この種の四字漢語が多く見られる背景には、漢籍漢文の文体形式（漢字 4 字で一区切りになる語句が多い）からの強い影響を指摘できよう。

4.3 客述関係の四字漢語

N+V 客述関係の四字漢語は、名詞性の前語基 (N) と他動性を有する動詞性の後語基 (V) からなる。これに加え、客語を表す格助詞「ヲ」が省略されるという条件も必要である。なお、後語基 (V) の他動性については、蘭学資料と現代語の間でずれる可能性もあるが、実際の判断は現代語のサ変動詞の自他性を参照して行なうしかないので、ある程度の誤差はやむをえないことであろう。とにかく、N+V 客述関係の四字漢語は、語数はあまり多くないが、日本語独自の O+V 型統語構造を踏まえた語構成であるだけに、蘭学資料での使われ方が注目に値する。

前掲の表 5 によると、客述関係の四字漢語では、後語基が動詞性なのに、語尾に動詞の接続形(ス・スル・シ・シテ)が用いられた用例は 4 割未満にとどまっており、逆に、語尾に名詞の接続形(ノ・ハ・ニ・ト・ヲ・名詞止め)が用いられた用例は全体の 6 割以上を占める。まず、語尾に動詞の接続形が用いられた例をあげてみよう。

- ・燃質分解スルガ故ニ、燃焼絶エズ。(『気海観瀾広義』卷十)
- ・気類分離スルニ至レバ、発光乃チ止ム。(『気海観瀾広義』卷十四)
- ・硝球粉碎すること殆ど火薬の力に過ぐ。(『窮理通』卷之三)

上掲の諸例は、それぞれ、「燃質ヲ分解スル」「気類ヲ分離スル」「硝球を粉碎する」の表現から、格助詞「ヲ」が省略されて四字漢語の形になったと思われるので、N+V 客述関係の四字漢語として認定するのは自然であろう。一方、語尾に名詞の接続形が用いられた用例として、次のようなものが見られる。

- ・奇児は引力発明の名家にして…。(『曆象新書』中編下巻)
- ・飲食消化、乳糜製造ノ変常ニ起因シテ裏ヨリ表ニ達スル病ナリ。(『扶氏経験遺訓』卷六)
- ・之ガ為ニ粘液分泌ノ増進セルヨリ生ス。(『扶氏経験遺訓』卷十三)

この種の用例については、二通りの語構成が考えられる。一つは、動詞接続の場合と同じよう

に、たとえば、上掲の「引力発明、飲食消化、乳糜製造、粘液分泌」については、「ガ・スル」が省略された形と見なせば、N+V 客述関係の四字漢語としてとらえることができる。もう一つは、動詞性の後語基を名詞扱いにすることで、たとえば、上掲の諸例については、「引力ノ発明」「飲食ノ消化」「乳糜ノ製造」「粘液ノ分泌」から「ノ」が落ちた短縮形としてとらえる。この場合の語構成は、N+N 修飾関係の四字漢語になる。ただし、N+V 客述関係から N+N 修飾関係への移行は、後語基が動詞性のものから名詞性のものに変わるという前提条件が必要であるが、客述関係の四字漢語では、名詞接続の用例が6割以上を占めているので、動詞性語基から名詞性語基への移行は比較的起こりやすい現象だと推察される。近代以前の中国語において、このような品詞性の移行が実際にあったかどうかは不明であるが、これに対して、漢語サ変動詞を自由に名詞化できるのは、蘭学資料をはじめ、日本漢語の特徴として強調されるべきである。

5. 二字語基の造語力

ある二字語基が他の二字語基と結合して造られた四字漢語の数が多ければ多いほど、その二字語基の造語力が強いということになる。まず、蘭学資料から抽出した四字漢語の前部二字語基について、造語数の多い順にそれぞれの語基を並べると、表6のようになる。

表6 前部二字語基の造語力

造語数	語基数	語基と語例
16	1	神経（-閉塞、-変常、-布満、-衝動、-錯乱、-衰弱、-纖維、-運営）
10	3	角膜（-創傷、-潰瘍、-膿瘡）、血液（-健運、-脱泄、-稀解）、眼瞼（-反転、-破裂、-肉瘤）
7	2	大気（-弾力、-分離、-拡張）、瞳孔（-変形、-不定、-縮閉）
6	4	栄養（-補充、-過度、-長育）、物体（-衝突、-凝結、-燃烧）、眼球（-癌症、-瞬動、-突出）、粘液（-分泌、-過多、-結石）
5	2	精神（-錯乱、-気血、-運営）、脳髓（-閉塞、-麻痺、-衰弱）
4	9	大便（-秘結、-通利）、弾力（-強盛、-増加）、分子（-分解、-離析）、感覚（-過敏、-運営）、呼吸（-困難、-窒塞）、活潑（-健運、-稀渙）、膨脹（-溶解、-稀薄）、身体（-肥大、-疲弱）、組織（-分子、-形成）
3	12	病毒（-侵染、-転徙）、精力（-乏弱、-缺損）、慢性（-嘔吐、-熱病）、皮膚（-乾燥、-滋潤）、屈伸（-動揺、-運動）、生機（-発動、-作用）、食欲（-減少、-健良）、体温、外物、液質、粘結、蒸気
2	50	触覚（-過敏、-活動）、醇厚（-活潑、-熟成）、地球（-回転、-重力）、感動（-遲鈍、-過敏）、光線、緩和、揮発、痙攣、局処、抗抵、靈液、流利、流体、攀急、尿道、膿液、膀胱、気味、牽引、熱沸、人工、日光、柔軟、衰弱、酸素、歳輪、万物、温素、吸収、下行、重力、など
1	248	半身（-不遂）、包摂（-閉護）、薄気（-充滿）、飽和（-過度）、抱合（-親和）、卑点、避雷、病患、勃起、草食、産科、腸胃、常習、弛解、赤道、触知、伝送、創傷、磁石、刺戟、催進、淡水、弾性、導体、電光、定時、動体、鈍角、発作、反射、など
(514)	331	(1語基あたりの平均造語数は約1.55語になる)

表6によると、「神経」の造語数は16語で最も多く、造語数10語の「角膜、血液、眼瞼」はこれに続いている。しかし、全体的に見れば、造語数の多い語基が少なく、造語数が減少するに

つれ、該当の語基が逆に数を増している。造語数 2 語のレベルになると、語基の数が急増し、造語数 1 語だけのものは 248 語で、前部二字語基の 74.9% を占めている。そのため、1 語基あたりの平均造語数は 1.55 語に過ぎず、かなり低い数字となっている。

また、造語数の多い前部二字語基の分布状況を見ると、表 7 のように、ほとんどの語基が 1-2 種の資料に偏っていることや、「大気」と「物体」の 2 語を除けば、みな医学書に使われた用語で、医学書には造語数の多い語基が集中していることなどが特徴としてあげられる。

表 7 造語数の多い前部二字語基の分布状況

資料名		神経	角膜	血液	眼瞼	瞳孔	大気	物体	栄養	眼球	粘液
医学	1805『医範提綱』	6		4					2		5
	1815『眼科新書』		10	1	10	7				6	
	1857『扶氏経験遺訓』	8		5			1		4		1
物理学	1798『曆象新書』							1			
	1836『窮理通』										
	1851『気海観瀾広義』	2					3	4			
	1852『理学提要』						3	1			
造語数		16	10	10	10	7	7	6	6	6	6

次に、後部二字語基の造語力について見てみよう。前部二字語基と比較しやすいように、同じ方法で後部二字語基の造語数を整理し、表 8 にまとめた。

表 8 後部二字語基の造語力

造語数	語基数	語基と語例
9	1	神経(牽引-, 意識-, 動眼-, 分布-, 横膈-, 脊髓-, 交感-, 十対-, 運化-)
6	3	衝動(神経-, 揮発-, 刺戟-), 分子(組織-, 流体-, 同質-), 引力(日光-, 磁石-, 両極-)
5	6	閉塞(神経-, 尿道-, 蒸気-), 過敏(感覚-, 触覚-, 嗅覚-), 凝結(粘膜-, 物体-, 粘土-), 軟骨(弓状-, 環状-, 披裂-), 速力(光線-, 下行-, 同等-), 作用(生機-, 分析-, 形器-)
4	10	変常(組織-, 液質-), 動物(草食-, 冷血-), 分解(分子-, 元素-), 過多(粘液-, 脂肪-), 親和(抱合-, 凝聚-), 三角(等辺-, 直角-), 衰弱(神経-, 脳髓-), 下利(常習-, 溶崩-), 運動(屈伸-, 過剰-), 運営(精神-, 感覚-)
3	11	充滿(靈液-, 薄気-), 錯乱(神経-, 精神-), 乏弱(精神-, 視力-), 関渉(外物-, 自己-), 過度(栄養-, 飽和-), 過剰(体液-, 脂肪-), 活動(触覚-, 知覚-), 攀急(牽引-, 压迫-), 稀薄(大気-, 分子-), 運転(屈伸-, 拳動-), 重力(地球-, 赤道-)
2	46	保続(生育-, 生命-), 冰点(人工-, 自然-), 不遂(半身-, 麻痺-), 不足, 持續, 触知, 伝染, 喘息, 磁石, 弾力, 動揺, 発動, 分離, 分泌, 回転, 機関, 煎熬, 間錯, 減少, 健運, 結石, 敏捷, 膨脹, 疲労, 牽縮, 缺損, 生力, 生殖, 失血, 世界, 視度, 瞬動, 疼痛, 通利, 温暖, 稀解, 消耗, 消化, 循環, 壅塞, 原質, 運行, 張力, 窒塞, 製造, 滋潤
1	292	癌症(眼球-), 半径(歳輪-), 飽満(胃中-), 崩解(散渙-), 閉滞(月経-), 変形, 変性, 病因, 補充, 不定, 測器, 産出, 成形, 弛緩, 衝突, 充張, 出血, 除去, 処置, 伝送, 創傷, 刺痛, 錯綜, 代謝, 導体, 調和, 定法, 鈍滞, 耳鳴, 発明, 発生, 反転, 方法, 肥大, 分娩, 粉碎, 腐敗, 感触, 感動, 乾燥, 構成, 固結, 機能, など
(514)	369	(1 語基あたりの平均造語数は約 1.39 語になる)

後部二字語基で造語数が最も多いのは、やはり「神経」である。その他の特徴については、前部二字語基とほぼ変わらないが、造語数1語だけの語基がさらに比重(79.1%)を増しているので、1語基あたりの平均造語数は、前部二字語基よりも低下して、1.39語となっている。

この点に関しては、蘭学資料の三字漢語と比べて明らかに異なる。2+1型三字漢語では、前部二字語基の平均造語数は1.32語であるが、後部一字語基になると、平均造語数は7語となって大幅に増えている。つまり、後部一字語基は、種類が比較的少ないものの、造語数が多く、三字漢語の形成において中心的な要素を担っている。これは、蘭学資料の三字漢語に見える最大の特徴といえる。これに対して、表6と表8で明らかになったように、蘭学資料の四字漢語では、前部二字語基と後部二字語基はともに造語力が弱く、どちらも造語の中心的要素とはいえない構造になっている。そのため、語としての安定性が低い状態にあるといわなければならない。

6. 二字語基の出自状況

四字漢語の構成要素としての二字語基は、おおよそ、漢籍から借用したものと、蘭学者達が自ら新造したものの二種類に分類できると思われる。この二種類の語基は、それぞれどれくらいあるか、また、前語基と後語基でどのように分布しているか。2+2型四字漢語の性質を検討する際、まず、こうした問題に直面する。

漢籍での出典を調べるのに《四庫全書》(電子版)を用いることにした。同書は、中国歴代の典籍が3460余種も収録され、清の乾隆帝の時(1781)に完成した大規模の百科叢書である。同書で用例が見付かっていれば、蘭学者による造語ではなく、漢籍からの借用語という判断を下すための根拠になる。逆に、同書の検索で用例が得られない場合は、蘭学者による造語の可能性がかなり高いと思われる。しかし、実際に《四庫全書》で検索してみると、蘭学資料にある四字漢語がそのままの形で見付かったものは少なく、結局、前部二字語基と後部二字語基に分けて、別々に出典を求めざるを得なかった。調査の結果は、「4字出典あり」「2字出典あり」「2字新義あり」「2字出典なし」という四つのパターンにまとめることができる。

「4字出典あり」の語とは、漢籍において、蘭学資料の四字漢語と同形の用例が見られるものである。「2字出典あり」の語とは、漢籍において、四字漢語の用例はないが、前部または後部二字語基と同形の用例が見られるものである。「2字新義あり」の語とは、漢籍に同形の用例が見られる前部または後部の二字語基が、蘭学資料で新しい意味に転用されたものである。「2字出典なし」の語とは、漢籍において、前部または後部の二字語基と同形の用例が見当たらないものである。次の表9と表10は、それぞれ、前部二字語基と後部二字語基の出自状況を示している。

表9 前部二字語基の出自状況

資料名	4字出典あり	2字出典あり	2字新義あり	2字出典なし	資料別合計
1798『暦象新書』	1 (3.4)	27 (7.5)	1 (5.6)	1 (0.9)	30 (5.8)
1805『医範提綱』	17 (58.6)	125 (34.7)	4 (22.2)	23 (21.5)	169 (32.9)
1815『眼科新書』	0	23 (6.4)	0	25 (23.4)	48 (9.3)
1836『窮理通』	2 (6.9)	24 (6.7)	2 (11.1)	7 (6.5)	35 (6.8)
1851『気海観瀾広義』	6 (20.7)	54 (15.0)	3 (16.6)	13 (12.1)	76 (14.8)
1852『理学提要』	0	29 (8.0)	1 (5.6)	6 (5.6)	36 (7.0)
1857『扶氏経験遺訓』	3 (10.4)	78 (21.7)	7 (38.9)	32 (30.0)	120 (23.4)
出典有無の合計	29 (5.6)	360 (70.1)	18 (3.5)	107 (20.8)	514

表10 後部二字語基の出自状況

資料名	4字出典あり	2字出典あり	2字新義あり	2字出典なし	資料別合計
1798『暦象新書』	1 (3.4)	24 (5.9)	0	5 (7.1)	30 (5.8)
1805『医範提綱』	17 (58.6)	129 (31.6)	0	23 (32.9)	169 (32.9)
1815『眼科新書』	0	41 (10.1)	1	6 (8.6)	48 (9.3)
1836『窮理通』	2 (6.9)	24 (5.9)	1	8 (11.4)	35 (6.8)
1851『気海観瀾広義』	6 (20.7)	60 (14.7)	2	8 (11.4)	76 (14.8)
1852『理学提要』	0	23 (5.6)	3	10 (14.3)	36 (7.0)
1857『扶氏経験遺訓』	3 (10.4)	107 (26.2)	0	10 (14.3)	120 (23.4)
出典有無の合計	29 (5.6)	408 (79.4)	7 (1.4)	70 (13.6)	514

6.1 「4字出典あり」の語

『医範提綱』(1805)と『気海観瀾広義』(1851)の2資料には比較的多いが、対象となった514語の中で、わずか29語(5.6%)しかないので、四字漢語における日中共通の度合がかなり低いというべきであろう。語構成パターンで見れば、主述関係(N+V, N+A)の四字漢語は21語もあって、この種の語の72.4%を占めている。

- (N+V) 太陰盈虧 生機発動 大便結閉 肢体厥冷 大便秘結 津液凝結
寒熱偏勝 大便渋滞 肌肉瘦削 大便通利 循環往来 万物化成
電光下射 腠理閉塞 万物成形 半身不遂 皮膚乾燥
- (N+A) 氣息不利 耳目聰明 身体温暖 身体肥大

これらの語は、蘭学者達が漢籍から借用したものと思われる。ただし、近代以前の漢籍では、漢字4字で一つの区切りになることが多かったので、四字語というよりも、主述関係の語連結あるいは文として認識されていたと推測される。このほか、N+N修飾関係の4語(昼夜平線, 等辺三角, 鈍角三角, 生機作用), N+V客述関係の3語(人事不省, 飲食消化, 食物消化), および, V+V並列関係の1語(生成化育)などが見られる。このうち、N+V客述関係は、中国語元来のV+N動賓構造(述客構造)とは語順が逆になるので、日本語の代表的な統語構造としてよく

指摘されるが、上掲の3語は、漢籍にありながら、いわば、日本語の統語構造と同じ語順になっている。漢籍では次のように使われている。

- ・忽然昏倒，人事不省，類乎真中風病。(突然卒倒して，人事を知らなくなり，本当の脳卒中にかかったようだ。)《御纂医宗金鑑》(清・呉謙ら編，1742)
- ・此養生家謂之運動水土，即脾胃也。自然飲食消化，百脈流通。(養生家はこれを水土，即ち脾臓と胃を運動させるということで，自ずから飲食が消化されて，脈絡の循環がよくなる。)《普濟方》(明・朱棣ら編，15世紀初期)
- ・自六月二十五日以來，始覺食物消化，其熱亦止。(六月二十五日から以後，始めて食べ物が消化されたと感じて，その熱もまた止まった。)《聖祖仁皇帝親征平定朔漠方略》(清・温達ら撰，18世紀初期)

一方，中国語元来のV+N動賓構造(述客構造)と一致する語形が存在するかどうかを《四庫全書》で確かめてみると，「不省人事(560例)，消化飲食(25例)，消化食物(0例)」という結果を得た。つまり，近代以前の中国語では，V+N動賓構造の語順が基本的な統語構造になるが，わずかながらN+V客述関係の語順も使われることがあったようである。この点については，日本語独自のN+V客述関係が現代中国語の四字語の統語構造にどう影響したかを考える際，参考になると思われる。

6.2 「2字出典あり」の語基

この種の語基は，前部二字語基と後部二字語基で，それぞれ70.1%と79.4%を占めており，圧倒的な勢力を見せている。これによって，蘭学資料の四字漢語は，語基レベルで見れば，漢籍由来の二字語にかなり依存していたことがわかる。表11は，抽出語を医学資料と物理学資料の分野別に振り分けた上で，前部二字語基と後部二字語基の両方から，造語数2語以上の語基を抽出し並べたものである。

表11 分野別・前後部別から見た「2字出典あり」の語

	前部二字語基	後部二字語基
医学 3資料	大氣，精神，感覺，呼吸，身体，蒸氣，擊急， 衰弱，吸收，自然，血液，眼瞼，粘液，腦髓， 活潑，精力，皮膚，屈伸，生機，体温，粘結， 醇厚，感動，緩和，抗抵，靈液，流利，尿道， 膿液，膀胱，氣味，牽引，熱沸，柔軟，消化， 新陳，性力，眼目，意識，飲食，月經，脂肪， 知覺，肢体，造物 (45語基)	衝動，凝結，作用，動物，衰弱，運動，運管， 充滿，過度，擊急，回轉，減少，敏捷，膨脹， 疲勞，消耗，運行，循環，壅塞，閉塞，軟骨， 變常，過多，下利，錯亂，乏弱，過剩，活動， 運轉，不遂，不足，持續，伝染，喘息，動搖， 發動，分泌，機関，煎熬，間錯，健運，結石， 牽縮，缺損，生力，失血，瞬動，疼痛，通利， 温暖，稀解，壅塞，製造，滋潤 (54語基)
物理学 4資料	大氣，精神，感覺，呼吸，膨張，身体，蒸氣， 吸收，自然，運動，物体，彈力，外物，重力， 歲輪，造物，游氣，地球，粘土，光線，日光， 流体，人工，抗抵，膀胱，下行，冤鬼 (27語基)	衝動，凝結，作用，動物，運動，運管，充滿， 回轉，減少，過度，敏捷，膨脹，疲勞，消耗， 循環，運行，壅塞，分解，親和，三角，関涉， 稀薄，重力，冰点，磁石，分離，生殖，世界， 視度，疼痛，原質 (31語基)

表中の太字は、医学書と物理学書の両方、あるいは、前語基と後語基の両方においてともに用いられる語基を示しているが、その分布状況によって、次のことがわかる。まず、これらの語基はほとんど、現代語まで受け継がれ、今日でも使われ続けているものである。次に、この種の語基は全体の中で少数にとどまっていることから、蘭学資料の四字漢語では、語基の入れ替わりが激しく、臨時的な結合が多いことが推察される。また、同じ分野の前語基と後語基の間(左右の欄)では共通の語基が比較的少ないのに対して、違う分野の前語基同士あるいは後語基同士の間(上下の欄)には共通する語基が多いという傾向が見受けられる。つまり、前語基になりやすい二字漢語と後語基になりやすい二字漢語が別々にあるように思われる。

6.3 「2字新義あり」の語基

この種の語基は、漢籍には同形の二字語が見られるものの、意味の面ですっかり変わったので、むしろ新造語に近い性質を持っていると思われる。前部二字語基に用いられた「2字新義あり」の語基は次の6語で、造られた四字漢語は18語である。

分子－ 分子分解 分子稀薄 分子離析 分子疎合
 組織－ 組織稠密 組織変常 組織形成 組織分子
 栄養－ 栄養過度 栄養温暖 栄養補充 栄養補給 栄養不給 栄養長育
 揮発－ 揮発衝動 揮発透竄
 刺戟－ 刺戟衝動
 金属－ 金属製剤

一方、後部二字語基では、「新義あり」のものが「分子」と「組織」の2語だけで、造られた四字漢語は次の7語である。

－分子 組織分子 流体分子 聚成分子 同質分子 異質分子 異類分子
 －組織 纖維組織

6.4 「2字出典なし」の語基

この種の語基には、蘭学資料での使用頻度が高く、しかも、現代日本語に受け継がれているものが多く見られる。また、20世紀初頭に、日本書の翻訳を通して中国語に移入されたものも多いため、日中語彙交流の視点から見ても注目に値する。

まず、前部二字語基から造語数の多い順にあげると、「神経(16)、角膜(10)、瞳孔(7)、眼球(6)」(カッコ内は四字漢語の造語数)のほか、造語数3語のものは「液質、食欲、病毒、慢性」の4語、造語数2語のものは「引力、温素、虚性、局処、痙攣、酸素、触覚、纖維」の8語になる。その他、造語数1語のものは次の40語である。

圧迫 圧力 拡張 汗管 気管 稀液 焔衝 焔熱 元素 甲状
 高点 錯綜 嗅覚 硝球 暈屈 暈折 触知 舍密 節税 総身
 体液 炭質 単扱 弾性 張拡 動眼 導體 粘膜 燃質 卑点
 複扱 沸醸 方型 飽酸 飽和 脈管 焔解 溶崩 流質 硫質

また、後部二字語基に用いられたこの種の語基をあげると、「神経 (9), 引力 (6)」のほか、造語数 5 語のものは「過敏, 速力」の 2 語, 造語数 2 語のものは「触知, 弾力, 張力, 保続」の 4 語となっている。造語数 1 語のものは、計 37 語あるが、前部二字語基の場合に比べ、動詞性のもとの形容詞性のものが増えて、「圧縮, 圧力, 汚点, 癌症, 機能, 結晶, 繊維, 導體」などの名詞性新語を除けば、現代語に受け継がれたものが少なくなっている。

圧縮 圧力 曇暗 汚点 回束 会束 拡張 癌症 稀渙 稀淡
 機能 夾酸 狹縮 欣揚 屈線 結晶 健穩 翹翳 充張 縮窄
 松疏 暈屈 皺縮 繊維 叢束 増容 滯止 搖摯 透竄 導體
 軟化 膿瘍 沸醸 平全 迸脱 溶解 流態

7. 四字漢語の出自状況

前節において、前部二字語基と後部二字語基に分けて、それぞれの出自状況を見てきた。しかし、二つの語基が結合し四字漢語になった状態で、その出自状況はどうなるかはまだ明らかではない。ここでは、語基のレベルから語のレベルに視点を変えて、四字漢語としての出自状況を調べてみたい。

前述の「4字出典あり」「2字出典あり」「2字新義あり」「2字出典なし」の四つのパターンを二つずつ組み合わせると、実際には10通りの構成パターンをつくることができる。しかし、パターンが多すぎると、かえって出自分布の特徴がとらえにくくなるので、語数の少ない「2字新義あり」の語を新造語の一種と見なし、「2字出典なし」のパターンと合併することにした。その結果、「前語基+後語基」の組み合わせは、略称で表すと、「4字有典」「有典+有典」「無典+有典」「有典+無典」「無典+無典」という五つのパターンにしぼられるようになる。このような整理を経て、7種の蘭学資料で、四字漢語の各パターンの出自状況を調べてみると、表12のようになる。

表12 前語基と後語基の組み合わせで見た出自状況の分布

資料名	4字有典	有典+有典	無典+有典	有典+無典	無典+無典	資料別合計
1798『暦』	1 (3.5)	22 (7.2)	2 (1.9)	5 (8.9)	0	30 (5.8)
1805『医』	17 (58.6)	108 (35.5)	21 (20.2)	17 (30.4)	6 (28.6)	169 (32.9)
1815『眼』	0	23 (7.6)	18 (17.3)	0	7 (33.3)	48 (9.3)
1836『窮』	2 (6.9)	17 (5.6)	7 (6.7)	7 (12.5)	2 (9.5)	35 (6.8)
1851『気』	6 (20.7)	47 (15.5)	13 (12.5)	7 (12.5)	3 (14.3)	76 (14.8)
1852『理』	0	18 (5.9)	5 (4.8)	11 (19.6)	2 (9.5)	36 (7.0)
1857『扶』	3 (10.3)	69 (22.7)	38 (36.6)	9 (16.1)	1 (4.8)	120 (23.4)
合計	29 (5.6)	304 (59.2)	104 (20.2)	56 (10.9)	21 (4.1)	514

このうち、「4字有典」の語については6.1項で述べた通りなので、以下では、その他のパターンをとりあげてみたい。

7.1 「有典＋有典」の四字漢語

「有典＋有典」の四字漢語は、抽出語全体の約6割を占め、語数の最も多いパターンである。前語基と後語基はともに漢籍に由来したという点で見れば、「4字有典」の語と共通するが、両者の相違は、「4字有典」の四字漢語は、蘭学資料の四字漢語と同形の語がそのまま漢籍で見付かったもの、「有典＋有典」の四字漢語は、漢籍には同形の四字語がなく、前部二字語基と後部二字語基が別々に漢籍での出典が見付かったものという点である。前者は、すなわち、蘭学者達が漢籍から借用した四字漢語ということになるが、後者は、二字語基のレベルでは漢籍由来のものからなっているとはいえ、結合してできた四字漢語は、中国資料にはなく、しかも、新しい概念を表しているため、和製の新造語として位置付けるべきだと考える。その語例は次の通りである。

創傷＋出血	大気＋分離	弾力＋増加	地球＋回転	肺臓＋結核	呼吸＋壅塞
感動＋遅鈍	精力＋乏弱	抗抵＋過盛	神思＋安靜	気味＋酷烈	尿道＋刺痛
冷血＋動物	気状＋流体	人工＋冰点	生機＋活動	酸化＋炭気	天然＋磁石
活潑＋健運	流利＋運行	腹疾＋喘息	実性＋失血	子宮＋分娩	定時＋発歇
降下＋時刻	屈伸＋運動	生殖＋機関	製造＋装置	証治＋方法	乳養＋動物
過剰＋運動	有形＋病因	内薬＋誤用	膿核＋排出	気類＋分離	器械＋制造
軀体＋養育	身体＋構成	胎子＋産出	血液＋製造	乳汁＋分泌	吸収＋貯蔵
消化＋伝送	運動＋循環	粘着＋鈍滞	醇厚＋活潑	膨脹＋稀薄	

7.2 「無典＋有典」の四字漢語

「無典＋有典」の四字漢語でとくに注目したいのは、漢籍での出典が見当たらず、蘭学者による造語と思われる前部二字語基である。これを調べてみると、動詞性語基が1割余りで、名詞性語基が8割以上を占めている。しかも、後者の大半は、「引力、角膜、元素、酸素、触覚、神経、繊維」のように、現代語に受け継がれているものとわかる。これに対して、漢籍に出典を持つ後部二字語基では、動詞性語基が6割を超えて、名詞性語基が2割余りとなっている。しかも、動詞性語基には、「間錯、減殺、牽縮、侵染、変常、攣急」のように、現代語で使われなくなった語が目立っている。このパターンの語例は次の通りである。

圧迫＋攣急	引力＋発明	液質＋調和	温素＋発生	角膜＋創傷	拡張＋分解
眼球＋突出	虚性＋失血	焮熱＋衝動	痙攣＋疼痛	元素＋分解	甲状＋軟骨
酸素＋消耗	触覚＋活動	食欲＋健良	神経＋錯乱	繊維＋間錯	体液＋過剰
単拮＋親和	瞳孔＋異常	導體＋連接	粘膜＋凝結	燃質＋分解	卑点＋視度
病毒＋侵染	沸醸＋化熟	慢性＋痢疾	流質＋重力		

7.3 「有典＋無典」の四字漢語

「有典＋無典」の四字漢語は、7.2のパターンに比べて、「無典」と「有典」の順番を逆にした形になる。蘭学者の造語と思われる後語基を中心に見ると、名詞性語基が5割余りで、動詞性語基が3割余りとなっている。名詞性語基には、「機能、神経、導体、引力、速力、弾力」のように、現代語まで生き残った語が多数を占めているが、動詞性語基には、「稀渙、保続、充張、沸醸、欣揚、逆脱」のように、現代語で姿を消したものが多く見られる。前述の7.2のパターンと見合わせると、両パターン「無典」の語基では、名詞性語基の比率が常に動詞性語基の比率を上回っていることがわかる。これに対して、「有典」の語基では、両パターンともに、名詞性語基の比率が動詞性語基の比率より低くなっている。つまり、蘭学者の造語では、質量ともに、名詞に偏っていて、動詞は、主に漢籍からの借用に頼っていたという傾向が見られる。また、残存率から見ても、蘭学者の造語で、現代語に受け継がれた二字漢語には名詞が明らかに多い。一方、漢籍からの借用と蘭学者の造語を問わず、今日まで生き残った動詞の二字漢語は比較的少ないといわなければならない。このパターン「無典」の用例は次の通りである。

感覚＋過敏 感覚＋触知 吸収＋機能 血脈＋過敏 呼吸＋健穩 光線＋速力
 抗抵＋張力 催進＋結晶 磁石＋引力 生命＋保続 大気＋拡張 大気＋弾力
 動体＋屈線 脳髓＋軟化 不好＋導体 分布＋神経 膨脹＋溶解 木星＋引力

7.4 「無典＋無典」の四字漢語

二つの語基がともに蘭学者の造語で、これらが結合してできた四字漢語である。前述のように、ここにおいても、名詞性語基には、「触覚、嗅覚、弾性、神経、角膜、繊維、眼球」のように、現代語に受け継がれたものが多いのに対して、動詞性・形容詞性語基には、「錯繚、会束、暈屈、暈折、曇暗、翹翳、皺縮、狭縮、透竄」のように、現代語で姿を消したものが集中していると見受けられる。後者は、純粋な和製漢語というよりも、漢方医学書に見える動詞・形容詞に基づいて、若干の変形をした形でできたものと考えられる。この種の21語は次の通りである。

触覚＋過敏 錯繚＋会束 弾性＋流態 暈屈＋叢束 暈折＋回束 動眼＋神経
 角膜＋汚点 角膜＋曇暗 角膜＋膿瘍 角膜＋翹翳 角膜＋皺縮 脈管＋狭縮
 気管＋縮窄 神経＋繊維 炭質＋夾酸 嗅覚＋過敏 眼球＋痛症 張拡＋増容
 繊維＋組織 組織＋分子 揮発＋透竄

8. まとめ

蘭学資料の四字漢語と現代日本語の四字漢語を比較してみると、時代の移り変わりで語基の中身が大いに入れ替わったものの、語構成のレベルでは、両者の共通点がかなり多いように思われる。この意味で、蘭学資料の四字漢語は、現代語の四字漢語の前身に当たると言っても過言ではない。次に、小論で述べてきたことをいくつかのポイントにまとめる。

(1) 語基の意味的關係によって、四字漢語を2+2型、3+1型、1+3型、1+1+1+1型といっ

た構成パターンに分類することができる。蘭学資料の四字漢語では、2+2型のものが9割以上を占めているので、これを研究対象として選んだが、その他の少数パターンの存在にも留意したい(表2)。なぜなら、19世紀末までの中国語では、3+1型と1+3型の造語パターンがまれで、とくに、派生的に使われる一字語基の用法がほとんど見当たらなかったようである。しかし、蘭学資料の用例を見れば、現代日本語と共通する造語機能がすでに備わっている。

(2) 四字漢語内部の結合関係は、文レベルでの統語構造を圧縮したような仕組みとなっているため、主述関係・修飾関係・並列関係・客述関係・述客関係といった結合パターンに類別して、それぞれの語構成を検討することができる。分類の結果によると、蘭学資料では、N+V・N+A主述関係の四字漢語が最も多く、抽出語全体の4割以上を占めていることがわかった(表4)。ただし、事例を調べてみると、後語基が用言性(V・A)であっても、四字漢語の後続形は、動詞や形容詞に付く「ス・スル・シテ／ナル・ニシテ」などに限らず、名詞に付く「ノ・ハ・ヲ・ニ」も比較的高い割合で用いられている(4.1項)。類似のことは、V+V並列関係(4.2項)やN+V客述関係(4.3項)の場合にも見られる。この事象は、四字漢語内部の結合関係と四字漢語全体の品詞性が必ずしも一致しないことを示すと同時に、四字漢語は、語連結や文構造ではなく、自立語並みの性質を備えた「語」であることの裏付けにもなると思われる。

(3) 四字漢語を前部二字語基と後部二字語基に分けて、その造語力を見た場合、造語数の多い語基がかなり少なく、造語数が減少するにつれ、該当の語基が逆に数を増す傾向が見られる。前部二字語基では、造語数1語だけのものは74.9%を占めていることもあって、1語基あたりの平均造語数は1.55語という低い数字にとどまっている(表6)。後部二字語基の造語数は、前部二字語基とほぼ変わらないが、造語数1語だけの語基がさらに比重を増して79.1%となっているため、1語基あたりの平均造語数は、前部二字語基よりも低下して、1.39語となっている(表8)。この点に関しては、蘭学資料の三字漢語と明らかに異なる。2+1型三字漢語では、前部二字語基の平均造語数は1.32語であるが、後部一字語基になると、平均造語数は7語となって大幅に増えている。つまり、後部一字語基は、種類が比較的少ないわりに、造語数が多く、三字漢語の形成において中心的な要素を担っている。これに対して、蘭学資料の四字漢語では、前部二字語基と後部二字語基はともに造語力が弱く、どちらも造語の中心的要素とはいえない構造になっている。これは、語としての安定性が低い要因とも思われる。

(4) 四字漢語の出自を調べてみると、蘭学資料の四字漢語と同形の用例がそのまま漢籍で見付かったものが、全体の中で、わずか5.6%しかなかったので、四字漢語における日中共通の割合はかなり低いというべきである(6.1項)。しかし、前語基と後語基に分けてそれぞれの出自を求めると、漢籍で同形の用例が見付かったものは、前語基では70.1%、後語基では79.4%を占めており、圧倒的な勢力を見せている(6.2項)。つまり、蘭学資料の四字漢語は、語基レベルにおいて、漢籍由来の二字語にかなり依存していたことがわかる。これに対し、漢籍で蘭学資料と同形の用例が見付からず、蘭学者の造語と思われるものは、前語基と後語基において、それぞれ、20.8%と13.6%を占めている(6.4項)。

(5) 二つの語基が結合し四字漢語になった状態での出自状況を調べてみると、前語基と後語基

がともに漢籍由来の二字語で構成される四字漢語は、全体の約6割を占めていることがわかる(7.1項)。ただし、二字語基のレベルでは漢籍由来のものからなっているとはいえ、結合してできた四字漢語は、それまでの中国資料にはなく、しかも、新しい概念を表しているため、和製の新造語として位置付けるべきだと考える。

参 照 文 献

- 山田孝雄 (1940) 『国語の中に於ける漢語の研究』 東京：宝文館。
 斎賀秀夫 (1957) 「語構成の特質」 岩淵悦太郎・林大・大石初太郎・柴田武 (編) 『講座・現代国語学 II』 217-248. 東京：筑摩書房。
 野村雅昭 (1975) 「四字漢語の構造」 国立国語研究所 (編) 『電子計算機による国語研究 VII』 36-80. 東京：秀英出版。
 野村雅昭 (1988) 「二字漢語の構造」 『日本語学』 7(5): 44-55. 明治書院。
 石井正彦 (2001) 「〈文章における臨時一語化〉の諸形式—新聞の四字漢語の場合—」 『現代日本語研究』 8: 1-34. 大阪大学大学院文学研究科。
 村木新次郎 (2002) 「四字熟語の品詞性を問う」 玉村文郎 (編) 『日本語学と言語学』 123-135. 東京：明治書院。
 朱京偉 (2004) 「四字詞内部結構的中日比較」 『日本学研究』 14: 67-84. 北京日本学研究センター。
 朱京偉 (2011a) 「蘭学資料の三字漢語についての考察—明治期の三字漢語とのつながりを求めて—」 『国語研プロジェクトレビュー』 4: 1-25. 国立国語研究所 (冊子体の第1巻：117-141に収録)。
 朱京偉 (2011b) 「在華宣教師の洋学資料に見える三字語—蘭学資料との対照を兼ねて—」 『国立国語研究所論集』 1: 93-112. 国立国語研究所。

Four-Chinese-character Words in Written Documents of Dutch Studies

ZHU Jingwei

Beijing Foreign Studies University
 Invited Professor, Department of Linguistic Theory and Structure,
 National Institute for Japanese Language and Linguistics [-2010.10]

Abstract

In the contemporary Japanese language, four-Chinese-character words are widely used and have great vitality in word formation. But when did these word formation patterns and the various characteristics of four-Chinese-character words develop? This paper attempts to find an answer based on written documents of Dutch Studies from the latter half of the nineteenth century.

Previously, the author (Zhu Jingwei, 2011a) carried out a comprehensive analysis of three-Chinese-character words in these documents. This paper shifts the focus to the four-character words in the same texts. The topics addressed include word formation patterns, the productivity of the two-character elements that combine into four-character words, the origins of these two-character elements, etc.

The four-character words in Dutch Studies documents are the direct ancestors of many of the four-Chinese-character words used in contemporary Japanese, and also, as a result of communication between China and Japan, they led to many of the four-character words used in Chinese. Therefore, Japanese words of this type deserve further study.

Key words: written documents of Dutch Studies, four-Chinese-character word, two-character element, word formation pattern